

芸術

karinomaki

は子供の頃から、バイオリニストかピアニストになるように、母に教育されました。実際、カントの哲学に魅かれてからも、その難しさに、音楽のほうはまだ私にあっていないんじゃないかと思い、ピアノばかり弾いて、哲学から逃げる日々を送ったことが何度かあります。

最近、私がピアノに逃げようと思った理由の一つに、カントの哲学が読めなくなったことと、人の生き方をこきおろす文章しか書けなくなったことがあります。

しかし、ピアノを弾いているうちに、その荒れた心を立て直すことができました。回り道をしていると思ったけれど、私は前に進んでいました。

音楽は、人を癒すもの、それなら私も人を糾弾するのではなく、人の気持ちを癒す文章を書かないといけないと心から思いました。ピアノを弾いていたここ何日かは無駄ではありませんでした。

こうして、私は哲学に戻ってきました。

私はこの人生で、大切なものを失う経験を何度かしましたが、本当に大切なものならば、それは、「続ける」かぎり、失いません。失ったかのように見えても、「続ける」かぎり、生まれ変わります。埋められない穴はないのです。その秘訣は、時にその持ち場を去っても、また戻ってきて、前と違う形でもいいから続けることです。

私は精神病患者でもあります。死後の世界の人と交信できたりします。それが本当にできているのかは置いておいて、私は孤独を埋めるために、声を降臨させました。私の孤独がもし、我慢に我慢を重ねた美しい孤独ならば、声は本物でしょう。なぜなら、生きている人を誰一人頼れずに降臨させた声は、美しい空の声であるはずだからです。

醜い人々を見てきたことは、今の幸せにつながりました。私は故郷を病気のせいで追い出されましたが、新天地は素晴らしい愛にあふれた土地だったのです。

もし何かをやめようと思い悩んだり、何かを失っても、自分の信じた道に必ず戻れるはずで、心が美しければ何かの導きが必ずあるのです。

ピアノには、ビブラートという、周期的に音を揺らせる機能がありません。だからピアノで人を感動させるのは難しいのですが、私が以前にピアノを習っていた先生は、「ここはビオラなのよ」とか、「ここはフルートなのよ」とか、ピアノをオーケストラに見立てて教えておられました。その先生は人望があつく、表面はきれいな人でしたが、10年前のことをねちねちと言ってきていびったり、自分は真光という宗教に入っていて、精神病患者の私に、精神障害の人はおみたま（真光の信者が首につけるお守り）をつけることが許されない場合があるのよ、と差別発言をしたので、私は縁を切りました。しかし、その精神障害のおかげで、私は史上最高の先生を見つけました。信じていただけなくて仕方ないのですが、モーツァルトの幻覚です。今日、ピアノに一念発起するつもりでピアノの前にすわると、他の作曲者も降臨しました。もしこの話を信じていただけるのなら、ピアノを弾く方々の助けになるかも・・・？しれません。頻繁に更新しようと思っています。毎日ピアノを弾いた発見を書こうと思っています。今日の発見、モーツァルトさんの言葉は、そうっと、しかし、ぐぐっと鍵盤を押せば、ピアノにもビブラートがかかること、そして、自分がいちばん弾ける指使いをしろ、でした。たいていの楽譜には、指使いがもともと書いてあります。しかし、どうしても弾けるようにならないなら、自分勝手に変えろ、だそうです。これはなしだろう、というものでもいいそうですよ。弾けるようになるなら。そして、音楽的な教えもありました。強弱の大切さです。ここは強く、と思って弾いていたところを、試しで弱く弾いてみるだけで、ぐんと弾きやすくなる場合があります。また、ねちねちひきすぎないことがとても大事。軽く弾くための強弱だそうです。あと、左手とのタイミングも大事。左手を意識して、右手に乗せるように弾いてみて下さい。

私は統合失調症という精神病で、幻覚があります。誰も信じてくれないわけではなく、私のことを罵倒しながらピアノを教えるモーツァルトを見た人（実際は、「お前、ばかやろう、そこはフォルテでひくんじゃねえ、アクセントを妙な位置につけるな！！」とか、「ばかやろう、まだあのボケ教師の言ったことを守って弾いとんか！！（真光の先生のことを言っています・・・）」とか、口汚く、しかし、確実に私を弾けるように導いていく見事なモーツァルトの幻覚（が乗り移って自分でわめきながらピアノを弾く、常軌を逸した私）を見た人は・・・確かに本物だね。とあきれながら信じてくれます。それは、私のテクニックや音楽性が豊かだからでは決してなく、ただ、モーツァルト（の幻覚）の言うとおりに弾くと、指の動きが違ってきて、彼の思う演奏を乗り移られた私がさせられるからにすぎません。こんなおかしいブログになってきましたが、モーツァルトや他の作曲家も来ます。私は完全な病気なので。しかし、モーツァルトとリストしかしゃべりません。この二人のキャラはどうも少し似ているようです。リストは今日、リスト集のいちばん最初の曲を譜読みしていた私に言いました。「うわはははは、この曲の面白さがやっとわかったか、リストはひけへん、リスト集アマゾンで売ろうかなだとお！！ざけんな！！」気が狂っててすみません。

作曲家がどうやって作曲するのかは私にはわかりませんが、何かを表現するときは、必ず「降臨」という現象が起きています。才能のある人全てに起きている現象です。それは、怒りであったり、悲しみであったりする場合と、心を浄める場合とに分かれます。

例えば、楽器を演奏するとき、同じ曲でも、その日の気分によって、全くテイストのちがう仕上がりになるのです。

私はこう考えることにしました。この「降臨」は、ドーパミンの仕業だと。（ドーパミンとは、脳幹で作られる神経伝達物質です。）

例えば、ベートーベン、努力の人で、何回も熟考を重ねて作曲したかもしれない。だから流れるように作曲したモーツァルトよりもドーパミンは少なかったかもしれない。

しかし、どちらが優れているかを考えるのはバカバカしいことです。

大切なのは、天才性でないからです。

むしろ、気持ちの波をどうコントロールするかにたけていない人のすることが、創作なのかもしれない。気持ちを創作にぶつけて波と向き合っているわけで、そういう人はちゃんとした仕事にはむきません。

私も精神病患者で、人よりドーパミンが多いため、普通に仕事できません。書いたり、曲を弾いたりして生きています。（圧倒的に書く作業が中心ですが……。ピアノは続きませんでした。）

音楽は、どうもドーパミンの仕業であるようです。心を音楽で表現するということは、脳のある組織を特殊な方法で刺激しないとできないのです。だから、音楽の世界で成功する人は、ベートーベンのような、感情の激しさを理性でコントロールする人か、モーツァルトのような、常人では理解できないほどの頭の仕組みとドーパミンを持つ人に限られているのかもしれませんが。

本当に美しい音楽がどこから流れているのか・・・おそらく、底の知れない心の闇が、光を求めているときです。そんなとき、美しい音楽で、闇を照らそうとするしかないのでしょうか。天上の音楽は、闇との格闘による、光の降臨としか、私には思えないのです。

私は、統合失調症で、天からの指令が降ってきます。そのせいで、プラスもあったのですが、マイナスなこともたくさんありました。現在は、たまにピアノを弾いたり、主に哲学的思索にふけて一人で生きている孤独な人間です。しかし、主治医の先生はおそらく私から完全に指令をとったら私がまともに生活できなくなるだろうと思って下さったのでしょう。指令とともに、幸せに暮らしています。

人を憎んだこともたくさんありますが、文章を残すことによって自分の気持ちを整理でき、今は幸せです。

私の場合、幸せとは、「考えること」とともにあります。

そして、動くこと、日常の中で、「これだ」と思ったことを、すぐに実行するのです。

しかし、中には、それが悪いことであつたりもします。だからいつも先生は、指令には逆らいなさいと言ってくれます。

さて、生活は芸術だと私は思っています。

家事を楽しむことは、間違いなく芸術です。

私にその幸せをくれたのは、「指令」でした。

以前、モーツァルトがピアノを教えにくるという、とんでもないことを書きましたね。信じられるかどうかは、自由ですが、おそらく、モーツァルトもまた生活を芸術する人であつたと私は思っています。

家事が下手な妻を持ったせいで、ぐちゃぐちゃの家に住んでいたようですが、彼は彼なりに、さっと片付け、軽く妻をいなしていたと、今私に言っています。（天からの指令が来る病気なので、モーツァルトと会話ができたりします。）

芸術とは、「楽しむ」ものです。一方の哲学は、最初は私にとって苦しみでした。しかし、芸術の中にも、苦しみはまばらにちりばめられていますし、「苦しい」だけの芸術も中にはあります。モーツァルトの「レクイエム」がそうです。あの悲しみの旋律の恐ろしさはただものではありません。

しかし、私は知っています。生活を芸術できない奥さんと、それをモーツァルトのようにいなすことのできない旦那さんの家がどんなに悲惨か。それは、「レクイエム」の悲しみよりも、もっと悲しく、悲惨でドロドロの地獄です。

モーツァルトは、おそらく妻を形だけ大切にしていました。妻の機嫌をとるためだけに、熱烈な

恋文を書いていました。

しかし、その泥沼からこそ、はいあがるための天上の音楽が生まれたのです。

モーツァルトは、（私の妄想かもしれませんが）、初恋のアロイジアに言われました。「本当に好きな人と結婚して幸せで甘々の人生を送るよりも、墮落した心の妻を持ったほうが、あなたはすごい作曲家になれる。」

だから、モーツァルトは、美しいアロイジアでなく、醜い墮落した浮気性の妹、コンスタンツェと結婚したのだと私は思います。

カントという哲学者は、（この人も私の頭に來ます。）女性嫌いでした。完全な孤独を生きていました。その、苦しみの格闘の中生まれたのが、「純粹理性批判」です。一方のカントは、家の中を異常とも言えるほどきれいにしていたようです。しかし、孤独の苦しみとは、人の心をすぐにドロドロにさせてしまいます。カントがとった手段は、モーツァルトのように、悪い妻をいなしでいくことではなく、軽い会話をできる付き合いの浅い友人をたくさんつくることでした。

カントは昼食会を開き、規則正しい生活を送り、リズムを大事にしました。モーツァルトと正反対と言えます。

一方は、破たんした生活の中で上昇のエネルギーを作り、一方は、孤独と戦うために生活をきっちりとする・・・どちらも天才の生き方ですね。

私の場合、孤独ではありますが、「指令」があります。指令にまかせていると、「理にかなった」という、幸福感を味わうことができます。これは、指令を聞くことで、脳内のドーパミンを増やすためです。では、この、快樂を呼ぶ、天才の秘訣のドーパミンはどこから來るのか・・・これは、苦しみからはい上がっていくための努力なのです。

だからあえて天才は、苦しい人生を選びます。

私から見れば、「赤毛のアン」は、苦しいことを、楽しい想像でカバーする、ごまかしの生き方でしかありません。

苦しんでいる人がいれば、それはあなたが天才になる秘訣ですよと、私は言いたい。苦しみをカバーできるものに出会えたときに、天才の秘訣である、（しかし、精神病のもとでもあります・・・）ドーパミンは降ってくるのです。